

# ティンパニ

【英：kettledrums / 独：Pauken / 伊：timpani / 仏：timbales】

..... **楽器データ** .....

サイズ：直径約 50～80cm

ティンパニの名曲：ベートーヴェン《第九》、ブラームス・交響曲第1番、  
マーラー《巨人》、Rシュトラウス《ツァラストゥラ  
はこう語った》の冒頭、ホルスト《惑星》などなど

ティンパニを愛した作曲家：ベートーヴェン、チャイコフスキーなど

ティンパニたたき有名人：サイモン・ラトル（ベルリンフィルの指揮者）、全  
国お茶の間知名度では元N響の百瀬和紀さん、ザ・  
ピーナッツ「恋のフーガ」でティンパニやってた人

.....

ステージ最上段の中央で一人ハデに動いて目立つ存在、ちゃんと演奏しなければ簡単にオーケストラを崩壊させることができ、奏者は「第二の指揮者」とも呼ばれる楽器。最終回の今回はオーケストラの「王様」ティンパニをご紹介します。

ティンパニは打楽器の団員が担当しますが、プロのオーケストラではしばしば専門の奏者を置いている特別な存在。通常は2～4台がセットで使われ、いわゆる「太鼓」のなかでも、ド・レ・ミなどの音程を出することができる点で異質な楽器です。使う音は曲によって違うので、そのたびに音を調整（チューニング）します。チューニングは、昔は皮をとめてある6～8本のネジ全部をまわしていました。この時ネジの締め方を均等にしないと変な音になってしまうので、調整は大変でした。しかしベルリオーズが活躍した19世紀前半に発明されたペダルの機構が広まってからは、足で踏むだけで簡単に音を変えることができるようになりました。これで奏者はラクになった？ いえいえ、このシステムが普及すると、作曲家は「1曲のなかでは楽器1台につき1コの音」という制約を破れるようになったのです。つまり、曲の最中に音を何度も変えるような曲が出てくる。しかも、作曲家にもよるものの時代が下るに

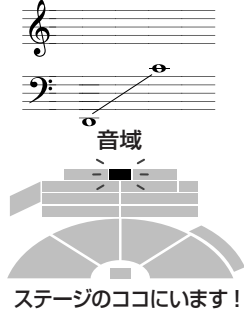


見えないところにこんな仕掛けが  
ペダル(左)とチューニングゲージ(右)

したがって音の数が増える傾向があり、時には手では楽器をたたきながら同時に足でいそがしくチューニングなどというテクニクも迫られます。これは手足をバラバラに動かすドラムセットより大変なんです。そんなときに役に立つのが「チューニングゲージ」。今何の音になっているのが、ひと目でわかる仕掛けです。

ティンパニの本体、玉子を半分に割ったような形の釜は、銅でつくられるのが一般的です。ここに子牛の皮やプラスチック系の材質の皮が張られています。本皮の楽器は温かみがありまろやかなとてもいい音がしますが、高価だし天気によって音程が変わるなど管理が大変。プロを除いて一般的にはプラスチック系のものが使われています。

ところで、「打楽器はただだから簡単そう」なんて思ってませんか？ それは違います！（断言）ティンパニを素人がたたくと、音楽をぶち壊す騒音しか出ません。これをちゃんとした奏者がたたくと、素敵な音色をいろいろ表現することができるのです。ちゃんとした奏者は曲のシーンに合わせて、ときには衝撃的な打撃音から厚い豊饒な響きまで、いろいろにたたきわけのです。音色をつくる時は、腕の使い方のほかにばちの選び方もポイントになります。ばちには、柄や頭の部分の材質、太さや重さなど数えきれないくらいの要素があります。柄の材質はおもに竹製と木製、頭の部分は通常は木やコルクの芯にフェルトが巻いてあり、芯の材質やフェルトの厚さによって音が違います。特殊なものでは皮巻き、木やコルクがむき出し、円形に切ったフランネルを積み重ねたばちなどもあります。ベルリオーズのように、「ここは木のバチで」などと楽譜に指定している作曲家もいますが、基本的には奏者は、こう



ステージのココにいます！

したたくさんのバチのなかから、曲のイメージに合わせ、また指揮者が要求する音色になるように、自分でバチを選んでいるのです。

さて、ティンパニのパートは通常は一人分しかありませんが、本日演奏する幻想交響曲の4、5楽章では、二人分のパートに分かれています。また3楽章では、4人の奏者による和音で雷の音が表現されています。これは珍しい使い方、つい眠くなる3楽章ですが、このシーンは最後なので寝ちゃうと見逃してしまいます。ベルリオーズはほかにも、《レクイエム》という曲では、なんと10人の奏者が8セットのティンパニをたたくという、型破りで斬新な試みもしています。こういう音は、ぜひ生演奏で体験してみたいものです。

ではここで、埼玉フィルの打楽器の女性陣に少し聞いてみましょう。ティンパニをやっていて楽しいのはどんなところですか？

「打楽器はみんなそうですが、一人で一つの楽器を担当するので何をやっても目立つことですね。でも間違ったらすぐにバレるけど」

「曲の途中で音を変えるのを忘れていて、思いつきたたいてしまったりすると相当、目立ちます」「今のティンパニはペダルがついているので曲の途中で音変えができますが、昔の学校の吹奏楽部にはそういう便利な楽器がなかったので、使う音の数だけ楽器を並べて演奏していました。練習のときにはそんなにそろえられないので代わりに机をたたいたりして、本番では自分の周りに最高で8個のティンパニを並べて演奏したことがあります。すごいでしょ？」

——それは圧巻ですね～！ 目立ったでしょう？ 「でもオーケストラでは出番が意外に少なく、大学時代、練習の時にあまりにも暇だったので、楽器の上でレポートを書いたりしてました」（※ 良い子はマネをしないでください！）

「ただ、出番がくれば重要な役わりなので、オケの実権を指揮者より握れるのはいいですね」——それは指揮者にはナイショにしとかなないと。



バチは材質もタイプもいろいろ

ティンパニは大きいので運ぶのとかは大変ですよ。 「重いので一人では運べません」 「みなさん運搬を手伝ってくれるの

で、お陰でいろんな人と仲よくなれるのはいいですよ」



奏者側から見るとこんな感じですよ

「それに大きいから楽器の陰に座っちゃえば見えないので、居心地のいいおうちって感じです。たまに、もたれてうたたねしたり」

——いくら暇でも、隠れてそんなことをしていたとは……。ところで打楽器を始めたきっかけは？ 「本当は他の楽器をやりたいんですけど、中学校で吹奏楽部に入り、ジャンケンに負けて打楽器に回されました」

——ああわかる、わかる。ありがちですね。 「でも性に合っていたみたいなので、今は負けてよかったと心底思っています」

「私は中学校のブラスでは小太鼓のほうが好きだったんです。でも大学でオーケストラを始めて、オケのティンパニってこんなに重要なんだとびっくりしてそれから好きになりました。いい音が出たり、バッチリ決まったときの爽快感は本当に病みつきになります。音楽を引っ張っていくという使命に燃えてこれからも精進したいと思います」——はい、そうですね。……と、すっかりインタビュアーのふりをしておりますが実はこの連載、もう一人のティンパニ（打楽器）団員で本日の幻想交響曲で1stティンパニを演奏する鈴木が原稿を担当してきました。足かけ8年、番外編も含め15回にわたって演奏会のプログラムに掲載してきた連載企画「オーケストラの楽器たち」も今回が最終回です。その間、練習後などに各パートのみなさんに話を聞きまとめてきました。ふじ最後までたどりつけたのも、いろいろ教えてくれた団員のみなさんのお陰でした。みなさんに心から感謝を捧げたいと思います。普段はあまり話す機会がなかったメンバーとも、あるときはお酒を飲みながら、あるいは目の前のケーキもそっちのけでいろいろな話ができたこと、また他の楽器について理解を深めることができたのは、当初は予想していなかった大きな収穫でした。そして——長い間ご愛読、またアンケート等で応援して下さったご来場のみなさん、ありがとうございました！

※ バックナンバーは埼玉フィルのホームページ内で公開しています。